

光州 5・18

2008(平成20)年3月10日鑑賞〈角川映画試写室〉

★★★



監督＝キム・ジフン／出演＝キム・サンギョン／イ・ジュンギ／イ・ヨウォン／アン・ソング／ソン・ジェホ／ナ・ムニ／パク・チョルミン／パク・ウォンサン／ソン・ビョンホ／チョン・インギ／クォン・テウォン／イ・オル／オム・ヒョソプ（角川映画、C Jエンタテインメント配給／2007年韓国映画／121分）

……まずは『KT』（02年）や『ユゴ 大統領有故』（06年）と同様、1980年5月の光州事件を真正面から描いた映画の登場を率直に喜びたい。韓国では歴代8位の興行収入とのこと。しかし、兄弟愛、男女愛、親子愛を重視したヒューマンドラマとしての描き方は、ちょっと演出過剰……？ 『実録・連合赤軍 あさま山荘への道程（みち）』（07年）のように、もう少し学生と市民の視点、また市民軍の内部からその本質を描いてほしかった、と私は思ったが……。

はじめて真正面から光州事件を！

100億ウォン（約12億円）をかけて2007年7月韓国で公開され、740万人を動員し、興行収入歴代8位の成績を取めた『華麗なる休暇』が、『光州5・18』という邦題で遂に日本でも公開されることに。

1980年5月18日から10日間続いた朝鮮半島の最南端の全羅南道にある光州での、戒厳軍と市民との戦いを真正面から描いた映画は、これがはじめてとのこと。光州事件の内容やその歴史的な位置づけは、プレスシートはもちろんたくさんの資料を読んで勉強しなければならないが、平和で豊かな日本では全く想像もできない大事件がお隣りの国韓国で起こっていたわけだ。この映画は冒頭、「この映画は実話にもとづく物語」という字幕が表示されるが、さてどんな物語が……？

『KT』（02年）では金大中の誘拐事件の真相（？）を知ってビックリしたし、『ユゴ 大統領有故』（06年）では、1979年10月26日に発生した朴正熙大統領の暗殺事件の真

相(?)を知ってビックリしたが、さてこの映画で描かれる光州事件の「真相」とは……?

ヒューマンドラマからの切り口は……?

この映画は主役として登場する4人の男女を通じて、光州事件を3種類のヒューマンドラマから描いている。第1は、タクシー運転手をしているカン・ミヌ(キム・サンギョン)と弟ジヌ(イ・ジュンギ)との兄弟愛。早くに両親を亡くしたミヌは、ジヌの親代わりとして一生懸命働き、ジヌがソウル大学法学部にトップで入学することを願っている。ちなみに、これって韓国映画によくあるパターン……?

第2は、ミヌが通う教会に通っている看護師パク・シネ(イ・ヨウォン)に対するミヌの恋模様の展開という男女愛。そして第3は、シネの父親である退役将校のフンス(アン・ソング)とシネとの親子愛。フンスはミヌが勤めるタクシー会社の社長でもあるのだが、ミヌはシネがフンスの娘であることは知らないよう。

『光州5・18』は、こんな4人の主人公たちが織りなす兄弟愛、男女愛、親子愛という3つのヒューマンドラマから光州事件を描いているが、さてそんな切り口の是非は……?

『華麗なる休暇』とは……?

この映画の原題は『華麗なる休暇』だが、さてその意味は……? プレスシートやネット情報によって私もはじめて知ったのだが、これは、1980年5月18日午後3時に戒厳軍によって開始された作戦名。すなわち、クムナム路を埋めつくしたチョンナム大学の学生や市民たちに対して、武装ヘリや戦車を含む2万人以上の国軍を動員して、その鎮圧を命じた作戦の名前だ。

ちなみに、中国で1989年6月4日に起きた天安門事件の死者は中国共産党の発表では319人とされているが、死傷者の数は数百人から数万人の間で複数の説があり定かではない。それに対し、光州事件のそれは、死亡者207名、負傷者2392名、そのほかの犠牲者987名とされているがこれも推定値であり、現在に至るまで正確な数値は発表されていない。死者数約2000名という説もあるとのことだ。

もっと突っ込めなかったの？

プレスシートには光州事件の年表がある。また、1980年5月21日の戒厳軍による市民への無差別発砲による大流血事件を翌22日付で大きく報道した朝日、読売、毎日、サンケイ4紙のトップ記事が載っている。したがって、その見出しを読んだだけでも光州事件の凄まじさがリアルに伝わってくる。またそれは、スクリーン上で最初に見る学生と市民に対する戒厳軍の警棒によるメチャクチャな殴打の様子を見れば、思わず「痛っ！」と声を上げざるをえないようなリアルさで迫ってくる。

ミノの活躍によって市民が武器を奪ったことによって展開されるその後の戒厳軍との銃撃戦の様子を見ていると、衝突はさらにエスカレートしていくが、残念ながらこの映画が描くのはそこまで。つまり光州事件についてのキム・ジフン監督の視点や突っ込みはそれ以上見られないわけだ。ちなみに、1972年2月28日に起きた連合赤軍による浅間山荘事件を描いた若松孝二監督の『実録・連合赤軍 あさま山荘への道程(みち)』(07年)がベルリン国際映画祭で最優秀アジア映画賞とCICAE賞を受賞したが、これは良くも悪くも原田真人監督の『突入せよ！あさま山荘事件』(02年)とは全く異なる若松監督の視点が明確に描かれていたため。そんな風に考えると、せっかく光州事件を真正面から描くのなら、ヒューマンドラマの視点だけではなく、もっとキム・ジフン監督ならではの視点と突っ込みがほしかったと私は思ったが……。

道化役の2人が目立ち過ぎ……？

『光州5・18』では、ストーリー展開上2人の道化役(?)が大きな役割を果たしている。その1人は、ミノの同僚のインボン(パク・チョルミン)。インボンはミノとシネの恋愛模様の展開においても、また戒厳軍に対する市民の煽動面においても、とにかく大声でしゃべりまくることによって大きな役割を果たしている。その相棒となるのが、自らをチンピラと称するヨンデ(パク・ウォンサン)。彼もインボンの傍で、インボンと共に大きな役割を果たすが、そんな2人の行き着くところは……？

韓国映画では、インボンのようなおしゃべりなお調子者がよく登場するが、彼らはべらぼうに声がデカイからとにかくよく目立つ。しかし、私に言わせれば、この映画での彼らは若干目立ち過ぎ……？しゃべくりが多いのは仕方ないとしても、あの感情表現のオーバーさと声のデカさは何とかならないのかと、少しうんざり気味に

……？

もともと、この2人の激しい感情移入によって、あちこちの席からはすすり泣きの声も聞こえていたから、目立ち過ぎの2人の演技には賛否両論があるのは当然。韓国で歴代8位の興行収入をあげたのは、きっとこの2人の感情移入が成功したためだろうが、私のような日本人観客には少し違和感が……？

シネはもっと しっかり！

この映画におけるシネの役割を観て、韓国における男尊女卑の思想を実感したのは私だけ……？ つまり、看護師として光州事件の犠牲者の看護をしてい

るシネの「目覚め」が意外に遅く、要所要所では泣いているだけという感が強いということだ。ミヌの仕掛けによるジヌを含めた3人での初デートは映画館の中だったが、映画館の中には催涙弾のイヤな臭いが……。そして、戒厳軍から逃げまどうデモ隊の一員とまちがえられて戒厳軍兵士から追いつめられたシネをミヌが助けたのは当然だが、そこでシネがとった行動は……？

映画は楽しむもの？ それとも勉強の素材？ 日本人にはなじみの薄い韓国近代史の幽・光州事件が今更らかに！ 一九八〇年五月、日本はカンヌでの「戒武者」の最高賞受賞に沸いたが、その時期鮮半島最南端にある光州では、華やかな休暇、「という名の血なまぐさい作戦が展開中！」南北に分割された韓国では、七九年十月の朴正熙大統領暗殺後、金大中・金泳二・金鐘泌の「三金」が表舞台へ返り咲き、民主化ムードが高揚するも、クーデターで権力を掌握した全斗煥将軍後の大統領が八〇年五月、非常戒厳令を敷いたため情勢は一挙

弁護士 **坂和章平** のMYE!
LAW DE!
SHOW



光州 5・18

梅田ガーデンシネマほかで公開中



©2007 C.J Entertainment&KiHweck
ShiDae.All Rights Reserved.

日韓新時代の中、あの闇に光を！

へ 鎮魂歌
は？

主人公たち

北 京五輪は約八十日後、チベットの騒乱事件を正確に総括するために、今あの事件の再検討が不可欠では？

時は流れ、盧武鉉の退場を志す向の大統領李明博の意図で日韓新時代の到来する中、二十八年前のあの事件を真正人は韓流特有の美男美女

面から描く問題提起作の登場は画期的だが、観る側は肝要。

面から描く問題提起作の登場は画期的だが、観る側は肝要。

大阪日日新聞 2008(平成20)年5月17日

また、シネが勤務する病院にはすでに死亡した市民しか運び込まれてこなかったため、路上にいる負傷者を救出するべく出向いた勇気ある医師（チョン・インギ）にシネが同行を志願したのは立派だが、医師が射殺されてしまうと、そこでシネがとった行動は……？

フンスの娘であれば、こんな激動する情勢の中、いくら女でももう少し自分の果たすべき役割を理解し、もっとしっかりした行動をとってもいいのでは……？

市民軍の実態は……？

1789年のフランス革命が成功したのは、もちろん市民の蜂起があったから。1980年5月21日の戒厳軍による市民への発砲という異常事態の中で、「市民軍」結成を呼びかけたのは、空挺特別部隊予備役大佐のフンス。かつて軍の同僚（競争相手？）であったチェ・スンギ大佐（クォン・テウオン）が指揮する戒厳軍の横暴さにいたたまれなくなり、やむなく立ちあがったというわけだ。

ところが、この映画はどうもヒューマンドラマや人情論のウエイトが大きすぎて、市民軍の結成と軍事訓練などの実態が全然描かれていない。市民軍結成のために何よりも必要な武器の略奪も、弟を殺されたミヌの個人的な怒りを原動力として実現したもので、フンスの指導力は何も発揮されていない。また、フンスが市民軍のリーダーに選ばれたのは当然だとしても、市民軍の組織体制や指揮命令系統の確立のために何をどのようにやったのか全くわからないまま。そのうえこの市民軍は、お調子者のインボンやチンピラのヨンデの煽動的発言によって右往左往しているから、これでは「軍」としての実態をなしていないのでは……？

そんな不安をもって観ていたところ、準備万端整えた戒厳軍が道庁を占拠する市民軍を一斉攻撃してくると、市民軍はひとたまりもなく……。これでは1969年1月18日～19日の安田講堂に立てこもった東大生共闘たちが機動隊と激しく対峙した姿ほどの抵抗もできないのは当然……？

市民たちの死の意味は……？

私はこの映画のヒューマンドラマ性の強調が少し鼻についたが、逆にその効果として、主人公たち1人1人の死の意味を観客にアピールしてくることになる。まず最初は、戒厳軍の無差別発砲によるミヌの弟ジヌの死。続いて視覚障害のある老母の息子

ジャンスの死、負傷者の救護に向かった医師の死、ジヌたちの高校教師（ソン・ビョンホ）の死など、市民の犠牲は次々と……。

最後に道庁に立てこもった者はすべて死を覚悟した人たちばかりだが、この中にはいったん説得に応じて退去したインボンもいた。また、フンスの説得を受けていったんシネと共に道庁を後にしたミヌも、結局はまた戻ってくることに。

圧倒的な火力を前に市民軍は1人また1人と命を失っていき、インボンもヨンデもついに。また、かつての部下ペ中佐（イ・オル）との対決を回避したフンスにも背後から銃弾が撃ちこまれることに。そして、最後はミヌへの乱射シーン。「武器を捨てて投降しろ、そうすれば命だけは助けてやる」との口上はいいのだが、そこで使われた「暴徒」という言葉がミヌに我慢できなかったのは当然。「俺は暴徒ではない！」「普通の善良な市民だ！」というのがミヌの心からの叫びだったはず。したがって、その結末は……？

彼らの死を次の時代に伝えていくのはシネだ。シネがマイクで市民に呼びかける声が耳に残るはず。そしてまた、エンディングに登場するミヌとシネの結婚式の写真が、涙と共にあなたの目に焼きつけられるはずだ。

2008(平成20)年3月12日記